



帝京大学小学校だより

帝京大学小学校

教科と実生活との関連は教科横断の活動から

帝京大学小学校 校長
石井 卓之

明けましておめでとうございます。本年も帝京大学小学校の教育活動へのご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

さて、OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA2022) が 2023 年 12 月 5 日に公表されました。

(<https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/#PISA2022>) 今回は、数学的リテラシーが中心分野でしたが、日本の課題は「学校での学びを実生活に活用すること」にあると考えています。これまで度々話題にしていますが、教科という縦軸に対して、教科を横断する課題解決型である横軸の活動が不足していることは否めません。また、大学入試も近年、総合型選抜や学校推薦型選抜が増え、ペーパーテストでは測れない探究力や表現力を重視した入試が増えてきています。世界トップレベルの研究力を目指す国際卓越研究大学の認定候補となった東北大学では、現在 31.6% の総合型選抜を今後さらに引き上げて最終的には 100% とする方針を打ち出しています。本校の探究科では、キャリア教育や里山プロジェクトを始めとした教科を横断する活動を通して、教科で身に付けた力を実際に発揮できるようにしています。今年度、4 年生と 5 年生が取り組んでいる起業家教育では、予算を立てたり、会計報告書を作成したりするためには、算数的な思考力は必須となります。来校した企業等の方たちからは、本校の児童の学びの高さを評価していただくなど、手応えを感じています。今年も、子どもたちの学ぶ意欲を高めながら、真の学びの育成を進めていきます。

○日本の生徒は、OECD平均に比べて、実生活における課題を数学を使って解決する自信が低い。また、数学を実生活における事象と関連付けて学んだ経験が少ない。

(v) 生徒質問調査

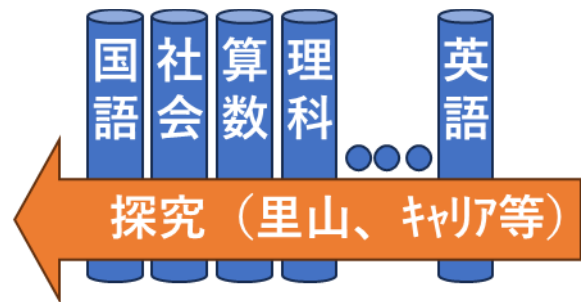
問43 数学の課題に対する自己効力感 (推論と21世紀的な課題)

「次のような数学の問題を解くことにどのくらい自信がありますか。」

問40 数学的推論と21世紀的な数学に関する課題に対する経験

「学校で、次のような数学的な活動をどのくらいやりましたか。」

	問43 (自己効力感)		問40 (経験)	
	※「とても自信がある」「自信がある」と回答した生徒の割合		※「何度もやった」「時々やった」と回答した生徒の割合	
	日本	OECD平均	日本	OECD平均
実生活の課題にからませて、数学的な解を求めること	30.0%	52.5%	46.6%	59.3%
実社会の問題の中から、数学的な側面を見つけること	22.7%	51.2%	37.8%	55.5%



職員室の窓



iPad や Chat GPT など便利なものを使いながら学び、様々な情報を取捨選択し、判断する力を養うことが大切であると考えています。そのために発達段階に応じて、友だちと協働しながら課題解決したり、既存の考えから新たな考えを見出したりしていくことが求められています。公式を丸暗記するような学習から、対話を通して新たな価値を発見し、そこに算数の面白さを実感できる授業を目指して、指導していきます。



《算数科 秋本恭誓》



《体育科 大森麻友美》

体育科では「豊かなスポーツライフ実現に向けて、資質や能力を育む」ことを第一の目標に考えています。低学年では、運動遊びの中から体の使い方を学び、様々な運動感覚を養っています。中学年以上は自己の課題を見つけ、解決する活動をしています。「スポテク」を活用し、1時間を振り返ることで自身の体の使い方や効果的な作戦を考え次の時間にいかす方法を身につけています。